

トロが食べられる

野生動物学研究室教授 高槻成紀

2010年3月18日、クロマグロの禁輸が否決された。つまり日本人がクロマグロを輸入し続けることができることになり、これからも食べられることになった。めでたい、めでたい。

だが、私はこの決定は長期的にみて、日本のプラスにならないと確信する。

誰もが連想するのは捕鯨問題であろう。シーシェパードという過激な捕鯨テロ集団の暴挙は抑制されるべきで、その意味での日本政府の批判は正当である。捕鯨についてはたくさん議論がある。例えば JWC は科学的な態度を切り札に欧米の被科学性を批判している。人間の行動が科学的な規範で決められるべきだという前提があればこれはよい態度であろう。だがそうだろうか、という疑問は残る。

あるいは欧米の傲慢さに対する批判がある。自分たちの価値観（かつては捕鯨を推進していたのに、今は掌を変えるように反捕鯨になったことを含めて）を押しつけることへの反論である。よくあるのは、クジラはだめでウシはよいのか。日本人には家畜は殺してよいという理屈はわからないというものだ。これは文化の違いとしかいいようがない。確かに価値観を押しつけられることは不愉快である。だが、現実の世界では強い国の価値観が正義であるとされる。アメリカ文明は世界を席卷している。中国やモンゴル、ベトナムという、かつてアメリカを敵視していた国でもコココーラやマクドナルドは大人気だし、欧米の価値観を否定する人がディズニールランドで喜んでいるのは論理破綻であろう。ともかく、欧

米のということがいやだというのなら、それに対する強い反論の論理と毅然たる態度が不可欠である。果たしてそれがあるだろうか。

また伝統的文化という主張もある。残酷であるなしの議論はあっても、とにかく長い間、そうして継続してきた文化は評価されるべきで、スペインの闘牛は残酷だが、それを文化として守るなら捕鯨も同じ理由で守られるべきだ、という主張である。だが伝統的であったのは「沿岸捕鯨」であり、外洋での捕鯨はもちろん伝統的ではありえない。

そのように考えると反捕鯨に分はなさそうに思える。個別の議論ではかろうじて相手をねじ伏せることはできるかもしれない。だが、子供でもわかるような大局的な議論ではどうだろうか。捕鯨問題は要するにクジラを食べることの意味に行き着く。それも量的な問題である。クジラを食べるといっても日本人が1年に1回少しの鯨肉を食べるくらいで、JWC がいうように「科学的分析」をしてクジラの個体群に問題がなければ、過激な愛護論を説得することはできるだろう。だが、問題はそういうところにあるのではない。「よく働くアジアの小国が金儲けが得意で金持ちになり、口がおごって世界中のクジラをとって、『科学的』というカモフラージュをして、金に力をいわせて食べまくっている」ことに問題があるのだ。こんな国民に誰が好感を持てるだろうか。

クロマグロ問題は同じイメージの議論だと思う。極東の国になんで地中海のマグロを送らないといけないのか。そういう「気分の悪

さ」が、個体数の減少という恰好の理由と結びついて禁輸につながったのであって、根は反捕鯨と同じだと思う。

日本政府はよく日本を環境先進国だという。要するに環境汚染を最少にする技術をもつ国だというわけだ。だが、たくさん汚染しておいて、それを抑制する技術を発達させる国を本当にエコだといえるだろうか。誰の目にも明らかなことは、日本は大輸入国、大消費国、大廃棄物生産国だということだ。その事実が変わらない状況で汚染抑制技術があるといっても、世界は日本をエコな国とはみないだろう。少なくとも鳩山総理が得々と二酸化炭素削減を掲げたところで、「日本はしょせん、消費大国じゃないか」というのが世界の見方であろう。

日本の国土は3分の2が森林で、これは先進国のトップである。その4割が人工林で、用材のために営々と植林がおこなわれてきた結果である。にもかかわらず、それはあまり利用しないで、海外から膨大な材木を輸入している。国内ではあまり伝えられなかったが、そのことが熱帯林の破壊をおこしているのはよく知られている。

あまりむずかしい話ではない。極東にある日本という島国は、人口が多く、国民は勤勉で、欧米の独創的な発明を器用にコピーして、効率的に良質な製品を作り、大もうけをしている。首相がコロコロ変わるが、誰が首相になってもアメリカのいいなりである。その国は強大な消費国で家を建てるために外国から材木を輸入して熱帯林を破壊し、クジラを食べるために世界の流れにさからって捕鯨をし、世界中の海から寿司の材料を買い、それが絶滅の危険があるといわれても、ロビー外交で票をかせいで否決しようとする。日本とはそ

ういうイメージを持たれている。いくら理屈を並べても、大局的にいってこのことを否定することはできない。

私はクロマグロの会議で会場を動き回り、耳打ちしたりしている日本代表を、自国民として恥ずかしく感じた。あれを外国人がみたとき、醜悪に見えないはずはない。「そうまでして食べたいのか」と。金を出せばなんでも手に入るというのは人間としてフェアな態度なのか、と。

ニュースでは「日本としてはなんとしても反対に持ち込みたい」といっていたが、私は「自分はそんなこと言った覚えはない。誰がどういう手続きで日本人の意見をまとめたのか」と思った。私たちより上の世代は質実に育った。少なくとも私の育った昭和30年代くらいまでの西日本では、食べ物を粗末にしたり、出された食事をうまい、まずいなどと言えきびしく叱られた。むしろ美食は恥ずべき琴であると教えられた（ただし立派な文化でお育ちの京阪神や東京周辺の方々はそうではなかったのかもしれないが）。私は、遠い国で捕られた高い魚が食べられないからといって不満を言う人がそれほどいるのだろうかと思う。

私は出されたマグロを断るほど徹底するわけではないが、しかしもしこの会議で禁輸が可決され、日本人がクロマグロを食べられなくなっても、なんら不自由はしない。むしろそうならいいと思う。

ニュースではまた「日本の伝統文化は守られた」といっていた。寿司が食べられることをそう言ったのだろうが、そうだろうか。寿司を伝統的な日本の食文化だというのなら、それ以上にたいせつなのは日本人は粗食を尊んだということのほうだ。自分の暮らす土地

のものを食べることに「知足」せよといってきたはずだ。食事をするを「いただく」といい、質実を美德とした。地球の裏側から高いネタを手に入れ、冷凍に原油からのエネルギーを使うといった贅沢が日本の伝統的食文化だというのは認識間違いもはなはだしい。むしろ日本の伝統文化はゆがめられたというべきである。

日本は今回の決定を喜んでいるが、それはものごとを短期的に見すぎている。これによってほくそえんだ日本代表の表情を世界のテレビは流すだろう。それは悪意に満ちたまちがった報道姿勢であるかもしれない。だが、ともかくそれを見て「やっぱり」と思う視聴者がいる。そうであるからこそ報道をするのである。報道とはそういうものである。そして「食欲で悪食な日本人」というイメージが定着してゆくことであろう。そのことは日本が環境先進国であろうとするイメージ作りに大きなマイナスとなり、長期的に見て日本の国益につながらない。

それよりも重大なのは、もし本当にクロマグロが絶滅したらどうだろうかということだ。今回の日本代表は、いつもは先進国の味方のくせに、「発展途上国の理解が得られた」と得意げだったが、それは「貧しい国は高く売るためには少ない動物でもとっていい」といっていることになる。今回の決定がむしろ乱獲にお墨付きを与えることになる可能性は大きい。もしクロマグロが絶滅したら、日本は「私たちではなく開発途上国が反対したのだからしかたがない」とでもいうつもりなのだろうか。それは捕鯨のときの決まり文句である「科学的捕獲は認められるべきだ」という主張と一貫性をもつのだろうか。私は日本人の胃袋に入ったためにクロマグロが絶滅したというのを知るのはごめんだ。

私たちは世界が日本をそういう目で見ていくことに、もう少し敏感になったほうがいい。